2023 年度前期 授業アンケートに対する文学研究科長・専攻代表からのコメント

＜文学研究科長・専攻代表からのコメント＞

■文学研究科長　　土肥　伊都子

大学院の授業アンケートは、2021 年度より、回答者の匿名性を保証するべく、文学研究科のどの専攻の院生からの回答かが不明になるよう回答を集めている。このことを断った上で、各専攻代表からのコメントをまとめ、研究科全体について評価をしたい。

まず、大学院生に対する授業アンケート結果については、全体的におおむね肯定的な評価が得られていたという認識を全専攻の教員がもっていたことが伺えた。ただし、アンケート項目の中で、「 授業時の発表のための準備期間は十分に与えられた」については、一部に否定的な回答が見られることを、心理学専攻代表も国語国文学専攻代表も、留意すべき結果として取り上げていた。これに関して、心理学専攻においては、課題を出すうえでは、他の科目との絡みで受講生たちの過重な負担とならないように配慮しているとの回答があった。また、国語国文学専攻においては、日本語教師を兼ねている受講生も多いため、過度な負担とならない量や質を求めていきたいとのことであった。

このように、今後も、院生一人ひとりの学力、体力などを考慮した指導をする必要がある。なお、英語学専攻の 2 名の院生のうち 1 名は、健康上の理由で欠席が多いという事情があるとのことで、複数の教員が心配していた。心理学専攻にも同様に、体調を崩す院生がいたとのことである。指導上の工夫や教員の励ましにより、無事、課程修了することを期待したい。

各教員の自己点検評価の内容について、心理学専攻代表からは、多くの教員が現場での実践力の素地作りにつながる授業内容となるように、また、受講生たちのより主体的で自発的な参画を求めた授業内外の課題の出し方となるように、工夫を凝らしていることがうかがわれたとのことあった。国語国文学専攻代表からは、一方的な知識の教授だけに陥ることなく、双方向的なコミュニケーションをし、アクティブラーニングを志向する傾向があるとのことであった。今後もますます、受講生の興味・関心などをくみ取った、柔軟な授業展開を行ってほしい。

最後に、国語国文学専攻内に、修士論文指導の時間（国語国文学特別研究）が固定されているのは時代遅れに感じる、という意見が出たようである。当該専攻代表の弁にもあるように、修士論文は、授業の一環であるため、時間割が固定されることにより、最低限毎週その時間には指導をするメリットもある。今後の検討課題にしてもよいであろう。

■英語学専攻代表　Philip Spaelti

The evaluations returned have mostly quite high scores, which is a positive result. However since only two of the 17 returned evaluations are from English major students we must be careful in interpreting the results. Among the specific comments, students mentioned the advantage of being in a small class, which makes it possible to focus on their needs. Teachers also mentioned that having few students made it possible for them to adjust the content to the students' needs.One particular issue that affected the English major was the fact that one of the students has health issues which lead to her being absent quite often. This was noted as an issue by several teachers.

■国語国文学専攻代表　　田附　敏尚

各担当の自己点検評価を概観すると、一方的な知識の教授だけに陥ることなく、教員も交えて議論する、発表させる、あるいは、データの PC 上での扱いを実際に作業して学ぶなど、双方向的なコミュニケーションを心がけつつ、アクティブラーニングを志向する傾向が見て取れた。また、貴重書等の資料を使い受講生の興味・関心を引き出す試みが見られたり、受講生の興味・関心にしたがって授業展開を柔軟に行ったりするなど、受講生中心の授業が繰り広げられたことが、良い評価につながっているものと思われる。

学生による授業評価を見ても、さまざまな項目で大半は良い評価を下しており、全般的には問題がないように見られる。「発表のための準備期間は十分に与えられた」という項目において 3 が 2 件、4 が 2 件回答されているが、これに関しては発表内容と準備期間との関係について、教員の考えるものと受講生の能力や作業量との間に乖離があるということだろう。本専攻には日本語教師として忙しく働いている受講生も多い。過度な負担とならない量や質を求めていきたい。

以上のように全体的に評価が悪くないため、今後の授業改善についても問題点は特段見当たらないが、修士論文指導の時間（国語国文学特別研究）が固定されているのは時代遅れに感じる、という意見があった。専攻代表としては授業の一環として修士論文に単位を与えている都合上、時間割に固定されることはやむを得ない点があると考えるし、また、最低限毎週その時間には指導をする、ということを明確にしておけるメリットもあるように思う。が、引き続き検討していきたい。

■心理学専攻代表　　小松　貴弘

授業アンケートの結果からは、全体として概ね肯定的な評価が得られたと考えられる。ただ、「7(1). 授業時の発表のための準備期間は十分に与えられた」という設問に関しては、一部に否定的な回答が見られ、時間の不足を感じていた受講生がいたことには注意を要すると思われる。

各教員の自己点検評価からは、多くの教員が現場での実践力の素地作りにつながる授業内容となるようにそれぞれに工夫を凝らしていることがうかがわれる。授業運営においては、多くの教員が受講生たちのより主体的で自発的な参画を求めて授業内外の課題の出し方に工夫を凝らしているものと推察される。

今年度は、修士１年生の人数が、一昨年度の４名、昨年度の６名と比較して、９名と多くなり、科目によっては、その人数の多さから授業運営に苦労する科目もあったようである。また、コロナ禍の渦中では実施できなかった試行カウンセリングが実施できたことは、受講生たちにとって、有意義な学びの機会となったものと思われる。

課題を出すうえでは、他の科目との絡みで受講生たちの過重な負担とならないように配慮する教員もあったが、一部の受講生が体調を崩すなどして授業運営に苦慮する科目もあったようである。また、提出物の期限を守ることなど、基本的な部分での約束事を守り切ることができない受講生も見られるなど、専攻全体で個々の学生の様子を注意深く見守り、適宜注意を促す指導を行うことが、今後必要となってくるかもしれない。